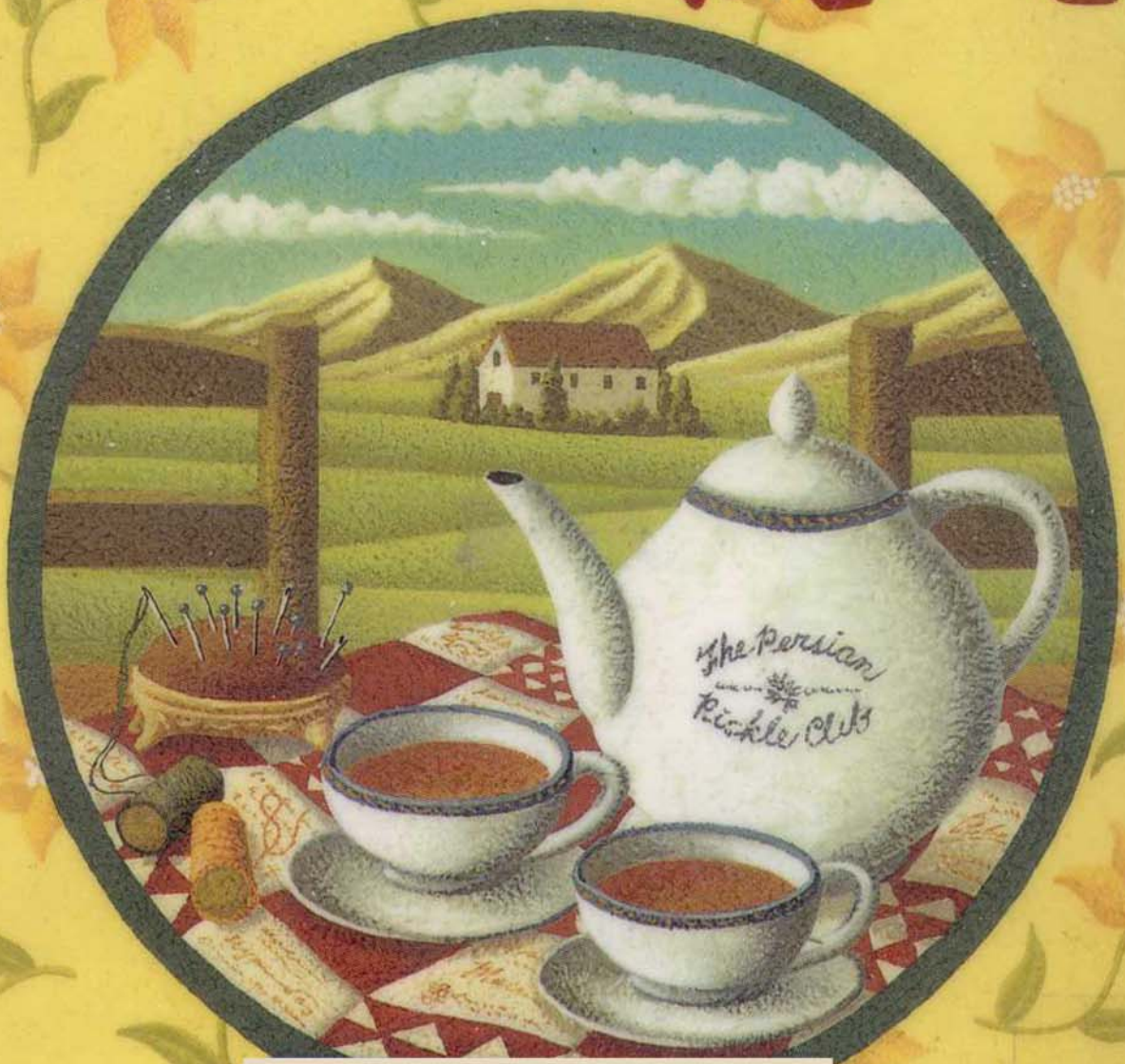
キルトとお茶と殺人と

サンドラ・ダラス
雨沢 泰［訳］



N
B

SANDRA DALLAS

THE PERSIAN PICKLE CLUB
by Sandra Dallas
Copyright © 1995 by Sandra Dallas
Japanese language paperback rights reserved by Bungeishunju Ltd.
by arrangement with Jane Jordan Browne of
Multimedia Product Development, Inc., Chicago
through The English Agency (Japan) Ltd.

文春文庫

キルトとお茶と殺人と

定価はカバーに
表示してあります

1997年10月10日　第1刷

著　者　サンドラ・ダラス
訳　者　雨沢　泰
発行者　新井　信
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-752738-3

文春文庫

江苏工业学院图书馆
藏书章

キルとお茶と人と

サンドラ・ダラス

雨沢 泰訳

文藝春秋

愛をこめて、メアリ・ダラス・コールへ。
姉妹は、友人のように永遠。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

感謝のことば

一九三三年、わたしの父は失業した。母と結婚してまもなくのことだった。そこで父と母はカンザス州ハーヴェイヴィルにある祖父母の農場に引っ越した。近所の人が、パパに日当一ドルの仕事をくれた。パパは一生懸命はたらいて、昼までに仕事を終えたが、報酬は五十セントだった。その夏、うちの両親は五十セント硬貨しか見なかったので、わが家では「五十セントの夏」と呼ばれた。残りのエピソードは、すべてフィクションである。

この物語はキルトの布きれのように、友だちから聞いた端切れからつくられた。ママとパパの話も端切れになっているし、エージェントのジェーン・ジョーダン・ブラウンや、その助手でデザイン担当のダニエル・イーガー・ミラー、マージョリー・バクスター、ハーヴェイヴィル・キルティング婦人会のみなさんの話も使われている。ボブ、ダナ、ケンドルからは暖かさと丈夫さをもらった。そして編集者のジェニー・ナッツが、ぜんぶを縫い合わせてくれた。

キルトとお茶と殺人と

主な登場人物

クィーニー・レベッカ・ビーン……ペルシャン・ピックル・クラブのいちばん若いメンバー
この物語の語り手　夫、グローヴァー
リタ・リッター……クラブの新入り会員　デンヴァーから来た新聞記者志望の女　夫、トム
アグネス・T・リッター……クラブ会員　トムの妹
セイブラ・リッター……同　アグネスの母。通称、ミセス・リッター
エイダ・ジューン・ジン……同　夫、バック
セプティマ・ジャッド……同　通称、ミセス・ジャッド　夫、プロスパー
オパリーナ・デュクス……同
セリーズ・ルート……クラブの創立メンバー　夫、チード
フォレスト・アン・ファインディング……同
エラ・クルック……同　夫ベンの失踪で目下独身
ネティ・バーゲット……同　夫はフォレスト・アンの弟、タイロン
フォスター・オリーヴ……牧師　妻、リジー
アルバート・サイプス……医師
ジョー・ブルー・マシー……流れ者　トムの使用人となる　妻、ゼファ　息子サニー
ハイアウォサ・ジャクソン……クルック家の作男　妻、デューティ
イーグルス……保安官

一章

これは親しくなってから聞いた話。

リタは初めてペルシャン・ピックル・クラブの面々に会ったとき、まるでメンドリの群れみたい、と思ったそうだ。

彼女はその朝、トリ小屋に卵を取りにいって、卵を産むメンドリのことを習ってきたばかりだった。しかし、あの意地の悪いアグネス・T・リッターにオンドリを調べているところを見られたとは、よっぽど運がバケツの下にあったのだろう。アグネス・T・リッターは、例によって嫌味な口調で、なんでオンドリの下には卵がないんだろうねえ、とリタに言った。おまけに、朝食にヒヨコのスクランブルを食べたくないなら、メンドリには近づかないことだよ、と言ってのけたのだ。

そもそも、一度も田舎に住んだことのないリタに、メンドリとオンドリを見分けろというほうがむりな話である。町の人間はたいていそんなものだが、リタは卵が食べられれば、どうや

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

って産み落とされるかなんて、ちっとも気にしない。リタはデンヴァーからやってきた大都会のシティ・ガールで、ニワトリのことより、有名作家になるにはどうするかを学びに大学へ行くほうが重要だと思っている。わたしは初めて、農家の主婦以外のものになりたいという女の人に出会った。

たしかに、リタの言うとおり、狭苦しい小屋にぎゅうづめになった口やかましいオバさんの一団のようなものだ。彼女がはいってきたとき、わたしたちはエイダ・ジューンの家のダイニングテーブルを囲んでいた。そして、全員目がとびだして、まさに茹でたスパゲッティで編み物をしているようなマヌケ顔になっていた。

わたしは針を持つ手をとめた。

手をあんまり長いこと宙に浮かしていたので、ミセス・ジャッドが、「針を置きなさい、クィーニー・ビーン、みつめるのもやめて」と言った。

言っときますけど、目が点になっていたのは、わたしだけじゃないですからね！　ミセス・ジャッドだって小さな金縁の眼鏡ごしに、うるんだ目でうかがってたんだから。でも、そりゃしかたがないわ。全員そうだったけど、誰のことも責められない。たしかに、トムの奥さんは美女だと聞いていた。グローヴァーがリッターの家でリタに会ったあと、すぐさま家に帰ってきてわたしに言った。あんなにすごいべっぴんは、雨が降って以来お目にかかったことがない、だって。もっとも、グローヴァーは雨のことをあまり憶えてないし、美的感覚もあやしいものだ。二歳になるまんまる目玉の牝牛のロッティが、えらい美人なんだそうだから。

でも、グローヴァーの判断は、ことトムの奥さんにかぎっては正しかった。リタは美人だし、いい女だった。かきまぜたばかりのバターのように新鮮な色の巻き毛は、わたしの茶色のボブカットとは大違いで、瞳はビスケットのように大きくてまるかった。わたしより小さくはないが、背は百五十センチそこそこと二番目ぐらいに低く、体重四十五キロほどのまさにかわいいタイプだった。手は赤ちゃんのようにすべすべでやわらかく、ふっくらとしていた。爪はよくみがかれて、体からはトピカのドラッグストアで売ってるような本物の香水の甘い匂いがただよってきた。わたしがときどきやるような、耳の後ろにバニラ・エッセンスをほんの少しつけるのとはわけがちがう。そう、わたしたちはニワトリ。でも、リタはハチドリ。彼女を見てるだけで、十分楽しめた。

だけど、ただ一人、アグネス・T・リッターはそうじゃなかった。

彼女はいつもの苦虫をかみつぶした顔つきで、リタの後ろに立っていた。まるで、堆肥(たいひ)の山ごしに吹いてくる風をかいでるような表情だ。たぶん彼女ならば、ローズヴェルト大統領が車椅子から立ち上がり、ダンスを申し込んできても、作男(さくおとこ)とツーステップを踊るみたいにふるまうだろう。

ともかく、アグネス・T・リッターはリタの服を見て、ふふんとくちびるの端をほんの少し曲げた。リタのドレスときたら、赤いシルクにレース飾りをあしらったおハンカチーフのようにシャレた代物だった。わたしは下に着ている赤いスリップの肩ひもが見えたので、エイダ・ジューンに、ああいう赤いスリップって、どこで買うんだろうねときくことにした。赤い下着

をつけるからと言えば、グローヴァーはきっと町に行っていいと言うだろう。ペルシャン・ピックル・クラブの集まりには、みんなけっこうオシャレをしてくるけれど、いくらなんでも、こういう派手なものは誰も着てこない。アグネス・T・リッターはもちろんだ。彼女はスピーゲルのカタログ通信販売で買った一ドル四十九セントのふだん着と、手製のスリップを着ている。どんな服を着たって、洗濯板のようなごつごつした体だから関係ない。アグネス・T・リッター、あんた、やきもち妬いてるんだね、とわたしは内心思ったよ。

リタの親友になってやろう――そう決心したのは、そのときだ。アグネス・T・リッターが義理の姉ならば、それぐらいしてやらなくちゃって。それに、ルビーがカリフォルニアに行って、二度と帰ってこないいま、わたしだって自分と同世代の友だちがほしかった。

「こちらはリタ、トムの妻です」

そう言ったミセス・リッターはアグネス・T・リッターの母親、すなわち、新婚のリタの姑である。当然、わたしたちはリタが誰だかわかっていたが、ミセス・リッターはなんの歓迎の言葉もなかったので、紹介するほうがいいと考えたらしい。わたしたちの礼儀作法は、リタの運勢のようにバケツの下にはいっていた。

いつも最初に話しだすのはわたしだ。

襟首に通してある服の紐をなおしながら言った。

「わたしはクィーニー・レベッカ・ビーン、グローヴァーの妻です。わたしたち、トムが帰ってきて喜んでるし、あなたがやってきたのも大歓迎だわ。だってグローヴァーはトムの親友な

んだもの。トムと違って、グローヴァーは大学に行かずに農業をはじめたけど、友だちだということに変わりはない。あなたの家の三軒先の農家がわたしのところよ。近所になんにもない田舎家で、乾いた卵の黄身みたいな色をしてる。ヤナギの葉が散る秋には、まわりがすばらしい色に変わるわ。グローヴァーは、レモンのなかで暮らしてるみたいだな、って言うんだけど」

一気にしゃべったので、息が切れた。つぎの人が話しださないうちにと、急いでつけたした。

「ペルシャン・ピックル・クラブにようこそ。わたしがいちばん若いメンバーです」

ちなみに、ペルシャン・ピックルとは、みんなが好きな生地の柄の名称。ペイズリー柄ともいう。

グローヴァーはいつもわたしのことを、緊張すると舌がべらべらまわる女だと言う。彼は緊張すると無口になるので、わたしたち夫婦は足して二で割ればちょうどいい。

リタは舌先でうわくちびるをちょんと舐め、わたしを横目で見た。

そのとき、「わたし、ヤナギの木は好きよ」と言ったのはオパリーナ・デュクスだ。彼女、口をあけると、たいてい調子っぱずれなことを言うので、みんなは気にもとめない。

この日の世話役のエイダ・ジューン・ジンがすぐに後をとった。

「クィーニーがみんなの気持ちを代弁してくれたみたいね。ペルシャン・ピックル・クラブにようこそ」

リタが手を差しだしたが、エイダ・ジューンはそれをみつめるばかりだった。

「握るのよ、エイダ・ジューン。そのために手をだしてるの」
ミセス・ジャッドがそう言うまで動かなかった。
ハーヴェイヴィルの女たちは握手の習慣がまるでなかった。エイダ・ジューンはほんとうに何をしていいかわからなかった。そこで、彼女は指先をリタの手のひらにちょんと押しつけた。リタは全員に手を差しだしてまわった。わたしの番になったので、思いきり強く握ってやった。リタはウィンクを返した。
リタが握手を終えると、彼女とミセス・リッターはテーブルの端にある空いた椅子に腰かけた。すぐにエイダ・ジューンは、椅子を用意したときリタを勘定にいれなかったことに気づいた。ひとつ足りないのだ。アグネス・T・リッターのすわる場所がなかった。エイダ・ジューンはバネ仕掛けのように席を立ち、キッチンから背の直立した古い椅子を持ってきた。わたしたち全員が少しずつ動いて、椅子のはいるところをつくった。立ったまま残されるのは、アグネス・T・リッターの宿命みたい。
「裁縫道具は持ってきた？」
ミセス・ジャッドがリタにきいた。もちろん、持ってきてないことは百も承知である。あのちっちゃなハンドバッグでは、ピン一本入れられないだろう。
「あら」と、リタが答えた。「わたし、お裁縫はしないんです」
縫い物をしない女なんて、見たことがなかった。全員がそうだったので、またも一同まじまじと彼女を見ることになった。やがて、セリーズ・ルートが気持ちのいい笑みを浮かべて言っ

た。

「最近の現代女性は、いろんなことに興味があるのね。婚前の娘はキルトを十三枚縫うものだよなんて言っても、いまどき説得なんかできないわ。わたしの若いころは、そうだったんだけど」

わたしたちはいっせいにうなずいた。ミセス・ジャッドはしなかったが、それはほかの人たちに遠慮がないからだ。アグネス・T・リッターもしなかった。こちらは百枚縫ったのに、旦那様が見つからなかったから。

「縫い物なんて、かんたんよ」と、わたしはリタに言った。「すぐにうまくなる」

アグネス・T・リッターがふんと鼻を鳴らした。彼女は裁縫箱をあけ、靴下をとりだして卵形のかがり台にかぶせた。

「まず、穴をかがることからはじめたら？　あんたの旦那様の靴下を、わたしが一生なおしてやる気はないからね」

アグネス・T・リッターだけが「キルターおまかせの日」に、繕い物や、実用の縫い物を持ってきた。「キルターおまかせの日」とは、世話役が材料を準備するのではなく、各自持ち寄りで、ピースをつくったり、はいだり、キルティングをしたりする日のことだ。わたしたちはみんな、「キルターおまかせ」が大好きだった。なぜなら、クラブのメンバーがそれぞれやっているキルトのデザインが見られるし、材料の布を交換できるからである。ペルシャン・ピックル・クラブのメンバーがつくったキルトで、ほかのメンバー全員の布がはいってないものは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com